

## ○さといも病害

### 乾腐病(糸状菌)

#### (生態と症状)

- ① いもに発生する。
- ② 罹病初期は、いもの断面の心部に赤色小斑点を生じ、病勢が進むと、内部が赤褐色になってスポンジ状に腐敗する。
- ③ 生育中は、発病の軽微な場合は判定困難であり、激しい場合は、茎葉の生育不良、葉脈間の萎れ、褐変、茎の倒伏、枯死を生じる。
- ④ 土壌及び種いもにより伝染する。罹病いもの残渣とともに土壌中で越冬し、翌年の伝染源となる。
- ⑤ 土壌中での病原菌の生存期間は長く、長期連作圃場では激発しやすい。
- ⑥ 生育中だけでなく、貯蔵中でも病勢は進展する。
- ⑦ 28～30℃の高温下で激増する。

#### (防除)

- ① 連作を避け、輪作期間をできるだけ長期間(可能であれば5年以上)とる。
- ② 健全な種いもを使用する。
- ③ 親いもは保菌率が高いので、種いもには孫いも若しくは子いもを使用する。
- ④ 発病圃場で栽培する場合には、必ず土壌消毒を行う。
- ⑤ 地中に残った残渣が発生源となるため、圃場に残った残渣を腐熟させることで、土壌消毒による効果の向上に繋がる。  
腐熟は、地温が高い時期から実施し始めるとより効果的である。
- ⑥ 土壌中の菌密度を減少させるため、pHの低い圃場ではpHの矯正なども効果的である。
- ⑦ 収穫後残渣は、早めに適切に処分する。

### 疫病(糸状菌)

#### (生態と症状)

- ① 葉、葉柄、いもに発生する。
- ② 初め葉に円形ないし楕円形の黄褐色斑点を生じ、次第に多数の病斑ができて拡大し、褐色の同心輪紋のある大型病斑へと発達する。後に、病斑は腐敗し、破れやすく、葉脈だけが残る。ひどくなると、葉柄が侵され、それより上部が下垂し褐黄変する。腐敗はいもに及ぶ場合もある。
- ③ 宿主範囲は、サトイモ科のみであり、感染株に寄生して越冬し、伝染する。
- ④ 病原菌の生育適温は27～30℃と、疫病の中でも高温性に属し、夏期温暖で多雨の時に多発する。

#### (防除)

- ① 栽培に適した水はけの良い圃場を選択する。排水の悪い圃場に作付けする場合は、高畝や暗渠・明渠(額縁)排水等の対策を講じる。
- ② 連作による病原菌の土中への残存を避けるため、輪作等を行う。
- ③ 土壌中の病原菌の拡散を防ぐため、使用したトラクター等の管理機は洗浄、消毒を行う。
- ④ 健全な種いもを使用する。
- ⑤ 発病圃場で栽培する場合には、必ず土壌消毒を行う。
- ⑥ 地中に残った残渣が発生源となるため、圃場に残った残渣を腐熟させることで、土壌消毒による効果の向上に繋がる。  
腐熟は、地温が高い時期から実施し始めるとより効果的である。
- ⑦ 収穫後残渣は、早めに適切に処分する。

## 黒斑病(糸状菌)

### (生態と症状)

- ① 主にいもに発生する。
- ② いもの表面に灰白色のカビが生じ、その後中央部が黒褐色のしみのような病斑となり腐敗する。
- ③ 病勢が進むと、病斑上に子のう殻の長い剛毛状突起ができ、その先端に乳白色クリーム状の子のう胞子塊を生じる。いもの切断面は3mm程度の深さに腐敗しており、この時期に剥皮して発病いもを洗うと表面に褐斑が出る。
- ④ 表面は随伴菌であるフザリウム等の雑菌で覆われるようになり、生気を失って収縮する。
- ⑤ 催芽床や本圃定植の初期から中期に発病すると、草丈が低くなり、茎葉の生育も悪くなる。種いもの腐敗が激しくなると、株絶え(枯死)を伴う。
- ⑥ 種いも及び土壌により伝染する。感染株とともに土壌中で越冬し、翌年の伝染源となる。
- ⑦ さといも以外の宿主範囲は不明である。
- ⑧ 罹病いもの腐敗崩壊部に存在する病原菌が収穫時に飛散し、傷口から侵入して貯蔵、輸送中に発病する。

### (防除)

- ① 栽培に適した水はけの良い圃場を選択する。排水の悪い圃場に作付けする場合は、高畝や暗渠・明渠(額縁)排水等の対策を講じる。
- ② 連作による病原菌の土中への残存を避けるため、輪作等を行う。
- ③ 土壌中の病原菌の拡散を防ぐため、使用したトラクター等の管理機は洗浄、消毒を行う。
- ④ 種いもは、未発病圃場から健全株を選び、親株につけたまま貯蔵したものを使用する。
- ⑤ 植え付け前に親株から種いもを外し、種いも消毒剤による浸漬若しくは粉衣消毒を行う。
- ⑥ 発病圃場で栽培する場合には、必ず土壌消毒を行う。
- ⑦ 地中に残った残渣が発生源となるため、圃場に残った残渣を腐熟させることで、土壌消毒による効果の向上に繋がる。腐熟は、地温が高い時期から実施し始めるとより効果的である。
- ⑧ 収穫後残渣は、早めに適切に処分する。

## ○さといも虫害

### センチュウ類

(生態)

- ① ミナミネグサレセンチュウが主体である。
- ② 初め親いもの細根に1~2mmの赤褐色紡錘形の細条斑を生じ、子いもへと広がる。
- ③ 病斑は拡大し、隣接する病斑と融合してついに根系全体が褐変し、細根は腐敗、枯死して脱落する。  
また、いもは暗褐~黒褐色となり、親、子、孫いもへと腐敗が進む。
- ④ いもは、収穫後の貯蔵中にも腐敗が進み、商品価値を低下させる。
- ⑤ 地上部は、梅雨明けごろから草丈や葉柄長が短くなり、葉数や葉面積の減少等により生育不良が目立ち始め、盛夏には株全体が萎凋し、下葉から褐変して一部は脱落する。  
激しい場合は、株が枯死、腐敗し、株消えとなる。

(防除)

- ① 連作による土中への残存を避けるため、対抗作物の栽培や落花生等との輪作を行う。
- ② 土壌中の拡散を防ぐため、使用したトラクター等の管理機は洗浄、消毒を行う。
- ③ 健全な種いもを使用する。
- ④ 前作で発生が認められた場合は必ず土壌消毒を行い、生息密度を低下させるように努める。  
地中に残った残渣が発生源となるため、圃場に残った残渣を腐熟させることで、土壌消毒による効果の向上に繋がる。
- ⑤ 腐熟は、地温が高い時期から実施し始めるとより効果的である。
- ⑥ 収穫後残渣は、早めに適切に処分する。

### アブラムシ類

(生態)

- ① ワタアブラムシやモモアカアブラムシが主体である。
- ② 吸汁害により草勢が弱まり、収量低下を引き起こす。
- ③ 5~6月に発生しはじめ、7~8月に多発しやすい。
- ③ 堆積した排泄物から「すす病」が発生し、下葉表面が黒く汚れ、葉の呼吸や光合成作用に悪影響を及ぼす。
- ④ キュウリモザイクウイルス(CMV)やサトイモモザイクウイルス(DMV)等の媒介虫であり、これらのウイルス病に感染すると、葉の鮮やかな黄色モザイク、葉脈緑帯、退緑小斑点や、株の奇形、矮化を生じる。

(防除)

- ① 増殖が早いため、発生初期防除に努め、生息部位に薬剤が十分かかるように散布する。
- ② 飛来防止や、天敵昆虫の温存のため、圃場周辺をソルゴー等の障壁作物で囲む。
- ③ ウイルス病対策のため、圃場周辺の除草やウイルス病発生株の早期除去に努める。
- ④ 収穫後残渣は、早めに適切に処分する。

## コガネムシ類

(生態)

- ① 土壤中に生息し、いも及び根部を食害する。
- ② 被害は8～10月に激しくなる。
- ③ 砂壤土や火山灰土で発生しやすく、たい肥等の有機質肥料を多用すると発生が多くなる。

(防除)

- ① 植え付け前までに耕起耕耘を行う。
- ② 生育期間中に使用できる農薬はないため、土壤消毒や粒剤による防除を行う。
- ③ 土壤診断に基づく適切な施肥を行い、過剰施肥を避ける。
- ④ 収穫終了後は速やかに残渣を処分する。

## ハスモンヨトウ

(生態)

- ① 5月頃から成虫が見られ始め、8～10月に多い。
- ② 主に夜間に活動する。
- ③ 若齢幼虫は集団で葉肉を食害し、中齢以降になると分散し、葉脈や葉柄を残して暴食する。

(防除)

- ① 早期発見や発生状況の把握のため、フェロモントラップ調査結果を活用する。
- ② 中・老齢幼虫になるにしたがって薬剤の効果が低下するため、若齢幼虫のうちに防除する。
- ③ 化学農薬使用回数の低減のため、合成性フェロモンによる交信攪乱剤を活用する。  
ただし、効果を上げるためには、まとまった面積への導入が必要なため、使用にあたっては、地域ぐるみでの導入を検討する。
- ④ BT剤を適切に使用する。
- ⑤ 収穫終了後は速やかに残渣を処分する。

## ネキリムシ類

(生態)

- ① カブラヤガやタマナヤガが主体である。
- ② 土壤中に生息し、夜間に地上に出現し、定植後間もない若苗の地際部を食害し、切り倒す。

(防除)

- ① 植え付け前までに耕起耕耘を行う。
- ② 生育期間中に使用できる農薬はないため、土壤消毒や粒剤による防除を行う。

# さといも（土壌消毒剤）

農薬名		毒性	適用病害虫						備考 (散布量方法等)	
IRAC・FRAC コード	商品名		一般名(成分名)	乾腐病	疫病	センチュウ類	ネグサレセンチュウ類	ネコブセンチュウ類		コガネムシ類 幼虫
①	②									
8A	DC油剤 D-D テロン	D-D剤 (97%)	劇				●	●	●	
8B	クロールピクリン	クロルピクリンくん蒸剤 (99.5%)	劇		●	●				● ケラ、ハリガネムシ類登録有り 床土・堆肥・圃場
8B	ドロクロール クロピク80 ドジョウピクリン	クロルピクリンくん蒸剤 (80%)	劇		●	●				● ハリガネムシ類登録有り 床土・堆肥・圃場
8B	8A ソイリーン	①クロルピクリン ②D-Dくん蒸剤	劇				●	●		
8B	8A ダブルストッパー	①クロルピクリン ②D-Dくん蒸剤	劇	●			●	●		
8F	ガスタード微粒剤 バスアミド微粒剤	ダゾメット粉粒剤	劇	●			●			本剤の所定量を均一に散布して土壌と混和する

# さといも（種いも消毒剤）

農薬名			毒性	適用病害虫		備考 (散布量方法等)
FRAC コード	商品名	一般名(成分名)		黒斑病	疫病	
① ②						
M03 1	ベンレートT水和剤20	①チウラム ②ベノミル水和剤	普 普	● ●	●	種いも浸漬 種いも粉衣
1	トップジンM水和剤	チオファネートメチル水和剤	普	●		種いも浸漬

# さといも（生育期/殺菌剤）

FRAC コード		農薬名		毒性	適用病害虫 疫病	備考 (散布量方法等)
①	②	商品名	一般名(成分名)			
M01		I Cボルドー66D	銅水和剤	普	●	
M03		ジマンダイセン水和剤 ペンコゼブ水和剤	マンゼブ水和剤	普	●	
11		アミスター20フロアブル	アゾキシストロビン水和剤	普	●	散布、無人航空機散布
40	M03	カンパネラ水和剤	①ベンチアバリカルフィソプロピル ②マンゼブ水和剤	普	●	
40	M03	ベネセット水和剤	①ベンチアバリカルフィソプロピル ②マンゼブ水和剤	普	●	
21		ランマンフロアブル	シアゾファミド水和剤	普	●	
21	27	ダイナモ顆粒水和剤	①アミスルプロム ②シモキサニル水和剤	普	●	散布、無人航空機散布

# さといも（植付時～生育期/殺虫剤）

農薬名		毒性	適用病害虫			備考 (散布量方法等)
IRAC コード	商品名		一般名(成分名)	ア ブ ラ ム シ 類	コ ガ ネ ム シ 類 幼 虫	
①	②					
3A	トレボン乳剤	エトフェンプロックス乳剤	普		●	
4A	モスピラン粒剤	アセタミプリド粒剤	普	●		植溝土壌混和
4A	アクタラ粒剤5	チアメトキサム粒剤	普	●	●	作条混和
5	ディアナSC ラディアントSC	スピネトラム水和剤	普			● センズメ登録あり
6	アニキ乳剤	レピメクチン乳剤	普			●
22A	トルネードエースDF	インドキサカルブ水和剤	普			● ● 無人航空機散布
22B	アクセルフロアブル	メタフルミゾン水和剤	普			●
23	モベントフロアブル	スピロテトラマト水和剤	普	●		● ハダニ類登録あり
28	プレバソンフロアブル5	クロラントラニリプロール水和剤	普			● ● 無人航空機散布
28	フェニックス顆粒水和剤	フルベンジアミド水和剤	普			●
28	ヨーバルフロアブル	テトラニリプロール水和剤	普			● ● 無人航空機散布
29	ウララDF	フロニカミド水和剤	普	●		
30	グレーシア乳剤	フルキサメタミド乳剤	普			● ハダニ類登録あり
UN	プレオフロアブル	ピリダリル水和剤	普			● スズメカ類登録あり